

特別支援教室や通級による指導などで指導を受けたことがある お子さまの保護者の皆様へ

お子さまのこれまでの支援などの状況を 進学先の都立高校にお伝えください

中学校で受けてきた特別な支援やご家庭での支援の状況などについて、進学先の都立高校にお知らせいただくことで、進学後の学校と一緒に授業での工夫などを検討できます。



高校段階では、進学や就職に向け、お子さま自身で決めることも多くなります。

自立して生活していくため、お子さま自身が自分の特性を理解し、特性に応じたコミュニケーション方法を身に付けるなどとともに、様々な場面で自ら支援要請できるようになることは、大変重要です。

(中学校までの支援の状況などを進学先に適切に引継ぎ、高校段階での授業における配慮や工夫などにつなげることが大切です。)

公立中学校や、都立中高一貫校への進学される方へ これまでの支援の情報などを共有することも大切です。

中学校では、ほとんどの授業を担当が指導していた小学校とは異なり、教科担任制により様々な教員が授業を行います。

そのため、授業における配慮などのお子さまの支援に関する情報の共有が重要になります。



《支援に関する情報を、進学先に効果的に伝えいただくために》

- ✓ 小学校や中学校などから卒業時に渡される、「学校生活支援シート（個別の教育支援計画）」などの支援に関する情報について、ご家庭での状況と合わせて進学先の都立高校などに提出いただきご相談ください。
- ✓ 卒業する学校と進学先の学校とで、直接、支援に関する情報を共有することも効果的です。ご家庭でもこうしたことにご理解いただき、学校間で情報共有してもよい旨を、在籍している学校や進学先の学校にお伝えください。

Q1 情報を進学先の都立高校に提供すると、何か支援や配慮を受けられるのでしょうか。

一例として、学習障害で読み書きに困難のある生徒に対し、イラストなどを活用した授業を行うことや、場面緘黙のある生徒に対し、授業中に口頭での回答を求めないなどの配慮などが考えられます。お子さまの状況や願いなどに合わせ、支援や配慮の内容を検討します。

Q2 子供が学校になじめないと日ごろから感じています。相談を受けてもらえるのでしょうか。

過去の支援や資料の有無に関わらず心配なことがございましたら進学先の都立高校にご相談ください。ご相談を受けた後、お子さまに学习上や生活上の困難があると考えられる場合には、学校として、困難の改善に向けた方策を検討し、学校で実施可能な支援や授業での工夫などにつなげていきます。

Q3 これまで特別支援教室で指導を受けていました。進学後も通級による指導を受けたいのですが。

高校入学後は環境が大きく変わることから、生徒の学校での状況や困難さの実態を改めて把握し、通級を含めた支援の在り方を検討します。通級による指導が必要と判定されても、申し込みから指導開始まで数カ月以上かかる場合があります。早期に指導を開始するためにも、進学先の高校へ早めにご相談ください。

Q4 学校に相談し支援を受けることになった場合、成績に影響することはありませんか。

支援を受けること自体で、成績や進路指導にマイナスの影響が生じることはありません。むしろ、効果的な支援や配慮を得ることで学びやすくなり、成績に良い影響が出てくるのが期待できます。また、卒業後の生活への安心感も高まると考えます。

Q5 学校生活支援シート（個別の教育支援計画）がありません。どうしたらいいですか。

進学先の学校と支援内容の情報を共有してほしい、進学先でも引き続き支援してほしい、というご希望を卒業する学校、進学先の学校の双方にお伝えください。学校間で情報共有と引継ぎを行い、これまでの支援内容を踏まえて、高校で実施可能な支援や授業での工夫などを検討します。

Q6 進学先にこれまで支援を受けていたことを知られたくありません。

学校生活支援シート（個別の教育支援計画）の提供や情報の共有は任意ですが、お子さまの成長の過程で、新たに困難な状況が生じることがあります。そうした場合における支援等に役立てるためにも、お子さまともご相談の上、進学先に情報を提供されることをご検討ください。



生徒への支援の一例を紹介します。

提出物を忘れがちな生徒への支援例

生徒Aさんは、提出期限を聞いても様々なところにメモするため、分からなくなってしまいます。

クラス担任は教科担任と協力し、日々の提出物や課題などを、教室のカレンダーに書き加えることとし、カレンダーを見れば全て分かるよう工夫しました。

担任は生徒Aさんと相談し、帰り際に必ずこれを携帯電話で写真に撮るとともに、自分のスケジュール帳にも書き写し、帰ってから保護者にも定期的に見せるというルールを設け、徹底するようにしました。

結果として課題などの提出物を忘れることが減りました。

保護者とは、自宅での確認をお願いするなどの連携を図るとともに、学校での支援の情報も面談などの場を通じて共有しています。

人前で声を出しにくい生徒への支援例

生徒Bさんは、家庭では話すことができますが、教室では声を出すことができません。

そこで学校は、授業でグループワークを行う際などに、生徒Bさんが、ICT機器に意見を書き込み、他の生徒が見られるようにする場面を設定しています。

また、クラスの生徒にも理解を促し、発表の際などに、別の生徒が代読することなどにより、生徒Bさんの意見や思いを他の生徒と共有できるようにしています。

周りの生徒たちも生徒Bさんの心情を理解し、ICT機器も活用するなど、工夫しながらコミュニケーションを図っています。

生徒Bさんも安心感が高まり、少しずつ言葉が出せるようになるなどの変化も見られています。